



探偵小説の始まり

謎を解く、事件を解決するという要素に関しては旧約聖書やヘロドトスの『歴史』の中にも見出すことができる。謎や犯罪、恐怖への興味は、悪漢（ピカレスク）小説やゴシック小説、盗賊であり後に探偵となったヴィドックの自叙伝『回想録』へと引き継がれ、謎解きを主眼とした最初の探偵小説エドガー・アラン・ポーの『モルグ街の殺人』が1841年に発表された。それまでは、犯罪実話か単純な事件読み物であったが、ポーは、アマチュア探偵のオーギュスト・デュパンが“密室殺人”を解決するという形式で、掲示された不可解な謎を論理と推理を駆使して合理的に解決に導くという、まったく新しいタイプの知的なパズル小説形式を創造した。ポーは引き続き、実際の殺人事件を下敷きにした『マリー・ロジェの秘密』や『盗まれた手紙』を発表する。ポーはオーギュスト・デュパンの知力を際立たせるために、要領の悪い語り手「私」を助手とする推理方式を考案した。このパターンはシャーロック・ホームズとドクター・ワトソン、ポアロとヘイスティング大尉のように踏襲されていった。

66年にはフランスのエミール・ガボリオが『ルルージュ事件』を、68年にはイギリスのウィルキー・コリンズが『月長石』を発表する。『月長石』はT・S・エリオットが「最初で、最長、最良の探偵小説」と称賛した。

参考文献

『ブラッディ・マーダー』ジュリアン・シモンズ著 新潮社 2003.5

『ミステリ文学』アンドレ・ヴァノンシニ著 白水社 2012.1



企画展示 探偵小説の系譜 <海外編>

シャーロック・ホームズ

1887年アーサー・コナン・ドイルによって初めのシャーロック・ホームズの物語『緋色の研究』が出版される。ホームズはベイカー街221番地Bのアパートにジョン・H・ワトソン博士とともに住んでおり、化学、解剖学、犯罪学に通じ、ヴァイオリンの演奏が得意で、ボクシングとフェンシングの腕も優れている。世間一般の人間の野心とは縁がなく、女性にも無関心である。変装が巧みで、小さな手がかりから真相を推理する超人的な人物として描かれている。著者のドイル自身は、歴史小説の仕事重要視しており、その仕事の邪魔となるホームズを『最後の事件』（『シャーロック・ホームズの思い出』）において宿敵モリアーティ教授とともにライヘンバッハの滝壺に転落させてしまった。しかし、ホームズを生き返らせてほしいという要望が殺到し、破格の稿料を提示され、ホームズは復活を遂げた。



企画展示 探偵小説の系譜 <海外編>

シャーロック・ホームズのライヴァルたち

このようなホームズ人気に目を付けて、「ホームズのライヴァルたち」と呼ばれる名探偵の登場する作品が次々と発表された。この時期の作品は、ホームズ作品と同様に短編シリーズを主とした。

1894年アーサー・モリソン著『マーティン・ヒューイットの事件簿』はホームズの『最後の事件』による休載の後をうけて、同じ『ストランドマガジン』に連載された。1907年ジャック・フットレル著『思考機械の事件簿』に登場するオーガスタス・S・F・X・ヴァン・ドゥーゼン教授（通称：思考機械）は、ホームズ同様の博覧強記型の探偵である。同年、R・オースティン・フリーマン著『赤い拇指紋』では、法医学者のソーンダイク博士が活躍する。09年バロネス・オルツィ著、大衆食堂の片隅に座って謎を解きほぐす『隅の老人』。11年G・K・チェスタトン著『ブラウン神父の童心』のずんぐりとした小柄な風采のブラウン神父。14年アーネスト・ブラマ著、盲目探偵『マックス・カラドス』。18年メルヴィル・デイヴィスン・ポースト著『アブナー

伯父の叡知』はアメリカの開拓時代を舞台とした珍しい作品である。

また、フランスでは07年『オペラ座の怪人』で有名なガストン・ルルー著、少年新聞記者ルールタビーユが密室事件を解決する『黄色い部屋の謎』や、07年モーリス・ルブラン著『怪盗紳士ルパン』が発表された。



企画展示 探偵小説の系譜 <海外編>

本格黄金時代 イギリス・フランス

それまで短編シリーズが中心だった探偵小説であったが、1913年E・C・ベントリー著『トレント最後の事件』の成功を契機に、20-30年代は長編小説中心の本格黄金時代が訪れる。

20年アガサ・クリステイは『スタイルズ荘の怪事件』で、ベルギー人の探偵エルキュール・ポアロと相棒のヘイスティングズ大尉を登場させた。クリステイは、寡婦になった母親のもと、正規の学校教育を受けずに育った。第一次大戦中に病院勤務をしていた時に身に着けた毒薬の知識などを活かして多くの作品を書き上げた。26年『アクロイド殺し』がベストセラーとなった数か月後に、クリステイ自身が謎の失踪を遂げ、全国規模で捜索が行われた。他にも老婦人ミス・マープルが探偵を務めるシリーズなどがある。

イギリスの作家としては、20年F・W・クロフツ著でアリバイ崩しで名高い『樽』、22年『クマのプーさん』で有名なA・A・ミルン著『赤い家の秘密』、23年ドロシー・L・セイヤーズ著、ピーター・ウィムジイ卿を主人公と

する『誰の死体？』、29年アントニー・バークリ著『毒入りチョコレート事件』などがある。

フランスでは、29年ジョルジュ・シムノンによる、『怪盗レトン』などのメグレ警視シリーズがある。



企画展示 探偵小説の系譜 <海外編>

本格黄金時代 アメリカ

一方アメリカでは、1926年S・S・ヴァン・ダインが、教養があり裕福な探偵ファイロ・ヴァンスが登場する『ベンスン殺人事件』、30年ジョン・ディクソン・カーが『夜歩く』を発表している。カーは密室トリックで名高く、ジョン・ディクソン・カー名義でギデオンのフェル博士を、カーター・ディクソン名義でヘンリー・メリヴェール卿（H・M卿）というどちらも巨躯の探偵が登場させた。33年E・S・ガードナー著『ビロードの爪』では、弁護士ペリー・メイスン、34年レックス・スタウト著『毒蛇』では肥満で美食家、室内で蘭を育てるネロ・ウルフと俊敏な助手アーチャー・グッドウィンが登場する。

29年にはフレデリック・ダネイとマンフレッド・ベニングトン・リーの合作でエラリー・クイーン最初の作品『ローマ帽の謎』を発表。ニューヨーク市警の警視リチャード・クイーンと、息子で探偵小説家のエラリー・クイーンが謎解きを行うシリーズが人気を博した。初期の作品には、事件の解決はここまですでに出揃ったという「読者への挑戦」が掲載されている。また、バーナビ

イ・ロス名義で『Xの悲劇』などのドルリー・レーン4部作を発表。作家活動以外にも、『エラリー・クイーンズ・ミステリ・マガジン』というミステリ専門雑誌や数多くのアンソロジーを編纂し、ミステリ業界の発展に尽力した。



企画展示 探偵小説の系譜 <海外編>

ハードボイルド・警察小説・ サスペンス・スパイ小説

ホームズのようなイギリス的推理の天才とは対照的な、アメリカ型の“ハードボイルド”な探偵が1920年代半ばから登場する。行動派で一匹狼の私立探偵は、ワトソンのような記述者を持たず、多くの場合一人称で描かれる。禁酒法によるギャングの勢力拡大や、公務員の腐敗などを背景に人気を伸ばした。ダシル・ハメットのコンチネンタル・オブ、サム・スペード。レイモンド・チャンドラーのフィリップ・マーロウ。ミッキー・スピレインのマイク・ハマー、ロス・マクドナルドのリュウ・アーチャーなどが挙げられる。

取り調べ、尾行、鑑識による分析調査など警察の日常業務を描いた警察小説の代表作は、エド・マクベイン著『警官嫌い』(56)に始まる87分署シリーズが挙げられる。

謎解きを主軸とせず、追い詰められた登場人物が危機的状況を脱する過程を重視するサスペンス小説は、ウィリアム・アイリッシュ『幻の女』(42)、パトリシア・ハイスミス著『太陽がいっぱい(リプリー)』(55)、セバスチャン・

ジャプリゾ著『シンデレラの罠』(62)などがある。

スパイ小説は、ジョン・バカン著『三十九階段』(15)がその原型とされ、イアン・フレミングは『カジノ・ロワイヤル』(53)など一連のジェームズ・ボンド・シリーズで人気を博した。他にジョン・ル・カレ著『死者にかかってきた電話』(61)などが挙げられる。